The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	名詞の助数詞的用法の機能に関する検討 ： 個別化と範疇化に注目して
Author(s)	東条, 佳奈
Citation	阪大日本語研究. 2018, 30, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/70096
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『阪大日本語研究』30（2018）

名詞の助数詞的用法の機能に関する検討
―個別化と範疇化に注目して―

A study on the function of nouns used as classifiers: Focusing on individualization and classification

東条 佳奈
TOJO Kana

キーワード：助数詞、類別詞、名詞、準助数詞、擬似助数詞、個別化、範疇化

要旨

日本語の数詞に続く表現の中には、「3項目挙げる」「2容疑者を逮捕」のように、名詞を助数詞として用いるものがある。本稿ではこれを「名詞の助数詞的用法」と呼び、これらが助数詞とどのように異なるのかについて機能の面から検討した。助数詞（類別詞）には従来、どのように対象の事物を計量するかに関わる「個別化」機能と、どのように名詞を意味分類しているかに関わる「範疇化」機能があるといわれている。名詞の助数詞的用法にこれらの機能があるかを検討した結果、可付番性のある容器型助数詞と準助数詞の一部のみ「個別化」を備えるが、多くは個別性を判断できないものとなった。その理由として、具体的な名詞であること、新たな計測単位自体であることが考えられた。また、「個別化」を備えるものは、典型的な助数詞と同様に「範疇化」を備えていると思われる。名詞から類別詞への文法化としていわれている五つの段階（N（Nouns）＞CN（Class nouns）＞Q（Quantifiers）＞intrQ（intrinsic quantifiers）＞CL（Classifiers））のうち、新たな計測単位になりうる多くの準助数詞はQにあたり、擬似助数詞であっても、具体的すぎる名詞はないことから、CNにあたる。また、同じCNにあたるものでも、準助数詞と擬似助数詞では具体性に違いがある。このように、擬似助数詞と準助数詞には、典型的な助数詞（類別詞）がもつ「範疇化」は無いものの、抽象度の度合いの異なる階層があることが読み取れる。

1. はじめに

日本語では事物を数える際に「紙1枚」の「－枚」、「本1冊」の「－冊」のように、助数詞とよばれる接辞を義務的に伴う。「－枚」や「－冊」は、「*枚の紙」「*冊を買う」のように、数字と切り離して独立して用いることができない。しかし、数詞に続く表現の中には、「3項目挙げる」「2容疑者を逮捕」のように、名詞を助数詞のように用いるものが見られる。本稿ではこのように、数詞に名詞を後接させているものを「名詞の助数詞的用法」とし、これらが、数詞と切り離せない（非自立の）助数詞とどのように異なるのか、機能の面から検討を行う。

以降、2節ではこれまで論じられてきた助数詞と名詞の区別と、本稿の立場・目的を述べる。3節で助数詞の機能を確認し、4節に分析、5節にて名詞から類別詞への文法化の段階の中で、

名詞の助数詞的用法が担う範囲に関する検討を示す。

2. 助数詞と名詞の区別と本稿の立場

2. 1. 助数詞を認定する基準について

数詞に後続する名詞については、これを「名詞と同形の助数詞」とし、特徴をまとめた成田（1990）をはじめ、いくつかの論考で取り上げられてきた。助数詞と名詞の連続性という観点では、現象を指摘したDowning（1996）や、両者の差異となる基準を示した田中（2012）、中心的なものと周辺的なものについて述べたMano（2013）がある。また、個別の語を取り上げ、通時的な観点から助数詞化（助数詞への進出）について論じたものとして田中の一連の研究（2014，2016a, b，2017）がある。

日本語の助数詞は形態的に数詞と独立できないとされているが、こうした名詞と同形の助数詞があるために、どこまでを助数詞として扱うかが問題とされる。影山他（2011）では、「私のような一会社員が裁判員になるなんて」の「一会社員」のような表現は、会社員の人数を数えるときに「1会社員、2会社員…」のようにいえないため、数を数える助数詞ではないとする。また、助数詞に「何（なん）」がつくと「何匹、何冊、何台、何社」のように対象物の数を尋ねる働きをすることから、「何（なん）」が数を質問する意味になるなら、それは助数詞である、としている。「何人（なんにん）」と「何人（なにじん）」では前者が助数詞、後者が名詞であるように、普通の名詞には「何（なん）」がつかないという。また、眞野・米澤（2013）では、影山他（2011）の基準に松本（1991）、飯田（1999）が挙げた基準を加えた以下の条件を満たすものを助数詞としている。

（1）a. 数詞に後接する。
　　b. 数えられている対象を示す名詞と共起する。
　　c.「何（なん）-」に後接し、数を質問する意味となる。

さらにMano（2013）では、「例（三つの例／3例）」のように名詞としても用いられる助数詞を「nouny classifiers（NCs）」とし、これを助数詞（CLs）と名詞（Nouns）の間にあるものと位置づけ、以下の三つの条件との関わりにより、NCsの段階性について説明している（カッコ内はそれぞれの例を筆者がまとめたもの）：

（2）・Semantic relations（object nounを数える対象にとるか）

・Countability
（「何」の付加は可能か（＝前述1c）、前接する数の上限があるか、
数え上げられるか、不定数がつくか）
・Referentiality（数える対象と共起するか）

Mano（2013）は、助数詞は全ての条件を備え、名詞はいずれも備えないものであるとし、どれだけこれらの条件を備えるかによって、NCsは助数詞に近いものと名詞に近いものという段階性があることを指摘する。最も助数詞に近いものが代表的なNCs（-例、-段、-粒、-株など）で、最も助数詞から遠いものが周辺的なNCsである（-美人）という。

一方、田中（2012，2014）では（3）のように、「数詞＋名詞」部分が副詞的位置に生起するかという構文的な観点を助数詞であることの判断基準とする点で、上記と異なる。

（3）a. 数詞の後ろに直結し、数量詞を成す
b. 数を表現される名詞と共起し、かつ、副詞的位置に生起する

この基準を採用する理由として田中（2017）は、数詞と結合することで生じた文法レベルの質的変化を捉えることができることを挙げている。成田（1990）においても、名詞と同形の助数詞は副詞的位置への生起に制限があることが述べられており、田中の基準は、連用修飾することが数量詞（を構成する助数詞）の特性であるという従来の指摘とも重なるものである。

このように、何を助数詞として認めるかについては種々の議論があるが、これらの可否の判断は、伊藤（2014）が指摘するように、文脈によって適格性の判断に揺れがあるものといえる。よって、どのような条件が「助数詞らしさ」に関わるのかはまだ検討の余地があると思われる。

2. 2.　本稿の立場と目的

東条（2012，2014）では、飯田（1999）の「（広義の）助数詞」や成田（1990）の「名詞と同形の助数詞」の定義に従い、数詞に続く名詞をいったん「名詞型助数詞[1)]」と捉えた上で、新聞一年分の資料より語例を抽出している。そして収集した語例について、前接する数の制限に関わる「可付番性」という観点によって二分した。東条（2014：27）では、名詞型助数詞の類型を以下のように示す（下線部は筆者による）：

（4）「名詞型助数詞」はまず、先行詞との関係や助数詞としての機能によって、「容器型助数詞」と「非容器型助数詞」に区別できる。「<u>容器型助数詞</u>」は名詞起源ではあるが名詞の

側面が希薄であり、「容器などを目安に、ある物の量を測る」という目的のためにもっぱら用いられる。一方、「非容器型助数詞」は、可付番性の有無により、「準助数詞」と「擬似助数詞」という二つの下位概念に分けられる。「準助数詞」は、数を積み上げて数えることができるが、「擬似助数詞」は助数詞の形を模した名詞であり、数と名詞の結びつきが臨時的であるため、数を自由に入れ替えることができない。また、これらは意味分野の点でそれぞれ、「抽象的な事柄を表す」「人物や機関など具体性の高い名詞を用いる」などの異なる特徴をもつ。名詞の数を数え上げられるという「可付番性」は、助数詞の本質であり、それを持たない擬似助数詞は、副詞的位置に生起することもできない。

具体例を挙げると、「容器型助数詞」は「寿司を二皿注文する」における「－皿」、「準助数詞」は「3項目挙げる」における「－項目」、「擬似助数詞」は「不明3青年の調査」における「－青年」、といったものである。「準助数詞」は、数詞を付けることで助数詞として用いることができる、助数詞に準じる存在の名詞をさし、「擬似助数詞」は、限られた場面でのみ、数詞を付けて臨時的に数詞と結びついた擬似的に助数詞を模した名詞をさす。東条（2012，2014）では、「準助数詞」と「擬似助数詞」を分けるための基準、すなわち「可付番性」を判断するためのテストとして、影山他（2011）同様、「何（なん）」を付加できるかどうかという観点を用いている。また、「容器型助数詞」という区分についても、容器を基準に量を測ったものを区別する成田（1990）の分類を踏襲している。

このように、東条（2014）で示した用語や類型は、従来の研究の立場と重なる部分も多いが、従来の研究が「名詞の中で助数詞を認定する」ことに焦点を当てているのに対して、名詞と助数詞とを区別せず、「擬似助数詞」タイプのものも類型として取り上げている点が従来の研究と異なる点であると思われる。2.1節に述べた通り、名詞か助数詞かを分ける基準は様々であるが、本稿でも「助数詞ではない」語（擬似助数詞）を分析の対象に入れる。しかし、こうした「助数詞ではない」語をも含めて分析するのであれば「名詞型助数詞」という用語は適切ではない。そのため本稿では、数詞に続く名詞を包括的に扱うために「名詞の助数詞的用法」とこれらを呼ぶことにしたい。なお、それぞれの類型については「準助数詞」「擬似助数詞」「容器型助数詞」という語をそのまま用いる。

「準助数詞」と「擬似助数詞」の差異としては（4）のような点があるが、これらと、数詞と切り離して独立できない（非自立的な）助数詞との違いについては東条（2014）ではほとんど考慮されていない。また、従来の研究では、前接する数詞との関係、元になる名詞の意味、文法レベルでの考察といった観点から、助数詞を認める基準や名詞・助数詞間の段階性が示され

ているが、数詞に後接する名詞について、助数詞が備える機能からの検討はなされていないようである。

そこで本稿では、(非自立的で、いわゆる典型的な) 助数詞の機能に注目し、名詞の助数詞的用法が、どの程度助数詞の機能をもつのかについて検討することを目的とする。

3.　助数詞の機能

三保（2010）は、助数詞は端的に言えば「数量を表す造語成分」であり、「その造語成分（形態素）は、当該数量表現の対象となるもの・ことについての類別上の情報を伝えるもの」であるため、助数詞を「数量類別詞」と捉えた立場で類別詞研究が行われてきたことを指摘する。

数量類別詞について論じた西光・水口編（2004）では、日本語の助数詞（同書の用語では「類別詞」）には「個別化（individualization）」と「範疇化（classification）」という二つの機能[2)]があることが説明されている。そして、眞野・米澤（2013）も指摘するように、従来これらの機能により、日本語の助数詞の分類がなされてきた。「個別化」は、数の指定がない、いわば概念だけを表しているような名詞を、数量表現と共起させることによって、個別の読みをさせる働きのことである。「範疇化」は、数える対象がどのような意味範疇に属しているかを表す働きのことである（水口 2004a，眞野・米澤 2013）。個別化では、どのようなものを最小単位として対象の事物を計量するかが問題にされ、範疇化では、どのように名詞を意味分類しているかが問題とされる。

また、北原（2007）は、助数詞のうち、計量対象の意味素性に従い、語の意味分類のための手段を提供するものを「類別詞」としている。そして、これらは「－冊」や「－人」のように個体を一個体ずつ個別的・離散的に計量するものであるが、一方で助数詞には、名詞の意味に依存せず、長さ・重さ・容積を持つものであれば計量することが可能なもの（－メートル、－グラム、-Cc など）が含まれるとする。助数詞の一部が類別詞にあたるものであることは、松本（1991，2014）においても指摘されている。

つまり、助数詞には計量対象の名詞をどのように計量するかを示す「個別化」というべき機能と、名詞の意味分類のための手段を提供する「範疇化」というべき機能があるが、後者の機能を備えるのは、類別詞だけであると考えることができる。これは、助数詞を「類別詞としての機能」と「計量詞としての機能」とに分けて論じる影山他（2011）とも共通する点である。

次項で、個別化・範疇化についてもう少し詳しくみてみる。

3. 1.　どのように対象の事物を計量するか（個別化）

日本語の名詞は、裸で現れるときは数に対して中立であり、単数にも複数にも解釈すること

ができる。水口（2004a）は、このような数の指定がないいわば概念だけを表しているような名詞を、数量表現と共起させることによって「個別化」させることが助数詞[3]の重要な機能の一つであると述べ、何を最小単位とするかによって、以下のような分類が可能になることを示す（以下、（5）は水口2004bの用語に従い、「助数詞」を「類別詞」とする）。

（5）「個別類別詞」：人（り・ひと），匹，本，枚，粒，台，丁，個，つ　など
「集合類別詞」：対，足，束，輪，山，セット，グループ，列，チーム　など
「計量類別詞」：杯，匙，袋，切れ，抱え，包み，キロ，グラム　など

「個別類別詞」は「本」や「枚」のように最小単位として個体を個別化するものである。「集合類別詞」は「対」や「セット」のように個体が集まったグループを最小単位とするもので、「杯」「キロ」のように個体の最小単位がはっきりしないものを量ではかって最小単位としているものが「計量類別詞[4]」であるという。また今里（2004：53-54）は、個別化の機能を「名詞が指示する地としての抽象概念から、構成素である図を取り出すこと」と説明し、「個別」・「集合」・「計量」といった個別性レベルの違いを以下の例によって示す。

（6）そうめんを茹でてみると、1本1本が絹糸のように美しい　（個別）
そうめんを2束茹でた。　（集合）
そうめんを大きな段ボール箱に1000箱分も準備したが完売した。（計量）

（6）にみるように、同じ名詞であっても、類別詞によってどの境界を利用して「地」に対する「図」を取り出すのかが定まるという。

影山他（2011）では、対象の意味カテゴリーに関係なく数量を表す助数詞を「計量詞」（measure specifiers）と呼び、これらは、特定の意味カテゴリーに属する名詞だけを限定して使われる「類別詞」とは異なるもの、という立場をとっている。影山他（2011：15）に掲載のリストでは（5）の計量類別詞として挙げられているもののほか、集合類別詞の中の「対，足，束，輪，山，セット」なども「計量詞」とされている。

3. 2.　どのように名詞を意味分類しているか（範疇化）

「○○が3本」といえば、○○部分が不明でも、指し示すものが人間や動物ではなく、何か細長い物体であると理解できるように、助数詞は、対象がどのような性質をもつのか、どのような意味のグループ（範疇）に属するのかを明確にする機能を果たしている。助数詞はそれが付

く名詞の意味範疇を特定することから、言語学では類別詞と呼ばれる（影山他 2011）。先にも述べたが、こうした助数詞における類別詞的な側面による機能が「範疇化」であると捉えられる。

助数詞の範疇化の側面に注目した研究では、（5）でいう「個別類別詞」を対象にした、類別詞の体系や用法に関する議論が盛んに行われてきた。類別詞の体系は、有生か無生かという有性性の区別がまずあり、有生であれば人間か（－人、－名）、人間以外か（－匹、－頭、－羽など）に分かれ、無生であれば形状に基づくものか（－本、－枚など）、非形状か（－台、－冊など）といったように分かれる階層があることが示される（松本1991，飯田1999，水口2004a，bなど）。

眞野・米澤（2013）では、範疇化においては有生物と無生物の区別が重要であり、類別詞「－匹」は無生物とは共起しない（3匹の｛生きたオキアミ／*コーン｝）が、計量詞であれば有生無生関係なく用いられる（3杯／3キログラムの｛生きたオキアミ／コーン｝）ことを示す。

このことからも、計量詞には類別詞的側面である範疇化はないということになる。

4.　分析

3節では、助数詞の機能である「個別化」と「範疇化」について確認した。本節以降では、両機能が名詞の助数詞的用法に見られるのかどうかについて検討していく。対象とする名詞は、東条（2014）に一部修正を加えた、容器型助数詞9種（表1）、準助数詞223種（表2）、擬似助数詞146種（表3）のリストである。これらの語例は『CD-毎日新聞データ集[5)]』1991年の一年分のデータより抽出したものである。それぞれの表では、国立国語研究所（2004）『分類語彙表―増補改訂版―』の分類番号に基づいて、意味分野（部門）ごとに、左列に中項目、右列に語例を示した。語例の冒頭の数字は、中項目ごとの語例の数（種類）である。また、同じ中項目の中でさらに分類番号が異なるものについては記号‘｜’を付している。なお、表2における（ ）内の語は、可付番性のテストをした際の「何○○」の用例数が1例であったものである。

これらの表1～表3について、個別化との関わり（4.1節）、範疇化との関わり（4.2節）を検討していく。4.1節では、水口（2004b）の「個別化」の分類を参考に、何を最小単位としているかという観点から、〈個別〉〈集合〉〈計量〉の3分類のいずれにあたるのかを分析した。分析の際には、影山他（2011）の「計量詞」の基準（対象物の意味カテゴリーに関係なく数量を表す）と「類別詞」の基準（特定の意味カテゴリーに属する名詞だけを限定して使われる）も考慮した。

4. 1.　個別化に関する検討

4. 1. 1.　容器型助数詞

容器型助数詞とした9種は、成田（1990）が、連続量として測られるものを、容器等を目安に数えているものやそれに近いものとしている語である。東条（2014）ではこれらを全て「容器・形状によってあるものの量を測る役割をもつもの」として一つの類型にまとめている。本調査においてもほとんどが影山他（2011）の分類における「計量詞」であった（表1）。下線を付した語は影山他（2011）に「計量詞」とあるもの、□で囲んだものは「グループ類別詞」の項目に上がっているものである。

「串」のみ、影山他（2011）のグループ類別詞となった。水口（2004b）には「串」はないが、個体がいくつか集まって作っているグループという考え方では、「集合」にあたると捉えられる。成田（1990）では、「－串」を「－鉢」とともに、「容器とはいいにくいが、他の何か（焼鳥とか花）を測る、という点で容器を目安に数えるグループと共通している」ものとしている。新聞においては、「串」はうなぎ、串揚げ、だんご、焼鳥、串柿などが見られたが、どのようなものが串にさして提供されるかを考えると、瓶やカップのように「その容器にさえ入っていれば数えられるもの」とは異なり、ある程度特定の意味カテゴリーに限定されるものであるといえるだろう。

表1　容器型助数詞（9種）のリスト

抽象的関係（7種）	
量	串、<u>袋、箱、缶、瓶、カップ、パック</u>
生産物および用具（2種）	
道具	<u>ケース、鉢</u>

4. 1. 2.　準助数詞

準助数詞のリストについては、数えられているものの個体性により、〈個別〉にあたると思われるものは波線を、〈集合〉にあたると思われるものは□囲みを、〈計量〉にあたると思われるものには下線を施した。加えて、影山他（2011）、水口（2004）に記載があったものについてイタリック体で示している。

表2の語例について、何を最小単位とするかという見方を加えてみたが、ほとんどのものが個別性の枠組みで考えることが難しい。たとえば中項目〈類〉にあたるものでは、「ジャンル」「パターン」「モデル」「種類」のような類型を示す語が並ぶが、これらの最小単位として認識されるものは個体であろうか、それとも集合であろうか。しいて言えば、連続量としてあるもの

表2　準助数詞（223種）のリスト

抽象的関係（93種）	
事柄	（3）項目、条項｜候補
類	（21）機種、業種、車種、種目、職種、事例、スタイル｜種類、品種、部門、ジャンル、パターン、モデル、タイプ｜階級、系統、段階、段、ランク｜条件、（因子）
様相	（3）業態｜成分、要素
作用	（4）ルート、コース｜往復｜編成
時間	（6）（昼夜）｜期間、（半期）、シーズン｜ステップ｜舞台
空間	（22）会場、（基地）、球場、地点、（聖地）、部位、コーナー｜筋｜枠、議席、区画、区間、口座、（選挙区）、打席、地域、地区、分野、ゾーン、ブロック｜方面｜画面
形	（1）サイズ
量	（38）得点｜（周波数）、チャンネル、カウント｜気圧｜けた、単位｜グループ、シリーズ｜組、こま、粒、ます、回線、学年、句、語、字、車線、世紀、席、世代、通話、票、文、イニング、オクターブ、カロリー、シート、セット、ページ、ポイント、レーン
人間活動-精神および行為（54種）	
心	（16）区分、分別、分類｜議案、テーマ｜科目、教科、学科、講座｜説｜（法）｜方式、（制度）｜案、法案、プラン
言語	（11）言語｜銘柄、タイトル、ブランド｜単語｜文字｜（文書）｜演目、番組、品目、（プログラム）
芸術	（3）作品｜カット｜曲
生活	（15）安打、競技、試合、四球、（四死球）、盗塁、本塁打、ゲーム、（トライ）、バーディー、パット、ホール、ボギー、レース、（併殺）
交わり	（3）（競技会）、大会｜引き分け
待遇	（1）セーブ
経済	（1）株
事業	（4）事業｜企業｜公演、場所
人間活動の主体（59種）	
家族	（2）家族、兄弟
人物	（1）選手
成員	（4）役｜アーチスト｜業者｜メーカー
公私	（8）家庭、世帯｜都市｜区、市、市町村、都道府県、州
社会	（16）フロア｜（教会）、教室、学部、大学、（寺院）｜駅、銀行、工場、（事務所）、（取引所）｜劇場、支店、店舗、病院、ホテル
機関	（28）機関、支部｜省庁｜施設｜（委員会）、議会｜部隊、（旅団）、（連隊）｜学級、球団、（協会）、組合、劇団、自治体、陣営、（政党）、（組織）、団体、党、派閥、法人、クラス、クラブ、サークル、チーム、パーティー、バンド

生産物および用具（11種）	
物品	（1）商品
衣料	（1）（ベッド）
食料	（1）食品
住居	（3）パビリオン｜部屋｜ドア
道具	（1）針
機械	（1）列車
土地利用	（3）トラック｜路線｜空港
自然物および自然現象（6種）	
物質	（2）分子、（物質）
天地	（3）大陸｜河川｜場面
身体	（1）遺体

を、類型的な枠組みでもって〈計量〉として捉える数え方である（＝新たな計測単位である）という考え方が近いだろうか。

（7）その結果、文字放送では「ニュース」「天気予報」「株式情報」の3ジャンルの番組が常に人気番組BEST3にランクされる。（92/3/29　芸能）

「ジャンル」は、書き手が何を「ジャンル」だと定めるかによって枠組みが決まるものである。水口（2004b）では、新たな範疇が必要になれば、それを表す類別詞が必要になり、その際に新たに類別詞を作ったり、外来語から借用したり、すでにある類別詞を拡張して使うことが示される。「-パターン」「-タイプ」「-ケース」など、類型を示す名詞が助数詞に進出していることは田中（2016b）が指摘しているが、新たな計測単位として、従来表しえなかった枠組みを数えることを担うとすれば、類型的な名詞で数える対象の意味に依存しないので、個別化の観点では〈計量〉にあたるといえそうである。同じようなことは空間を示す「-ゾーン」や「-ステップ」などにもいえると思われる。

（8）江戸以前のあかり、江戸のあかり、東京のあかりの3ゾーンに分け、あかりの道具の変遷と生活の変化を約500点の資料により展観する。（95/7/22　総合面）

「ゾーン」も、最小単位が何かを読み取ることが難しい。こちらも「ゾーン」という枠組みで区切って計測するものといえる。「ステップ」は工程や段階を数えるために使われるが、連続しているものを区切る、という見方では「計量」に近い。

抽象的な名詞だけではなく、名詞そのものであるがゆえに区切りにくいものもある。(9) の「舞台」は、公演一回分なのか、プログラムの種類を数えるのか、最小単位がわかりづらい。

(9) マクベス、欲望という名の電車、ヤマトタケルなど、大劇場から小劇場まで約80舞台の作品が収録されている。(91/10/14　特集面)

〈個別〉として個体を認識できるのは、「筋」「句」「文」「票」「字」「ページ」「曲」「株」「粒」「針」といったものであろうか。いずれも助数詞として浸透している名詞であると思われる。

ひとまとまりを最小単位ととる「セット」「グループ」「組」を〈計量〉、「チーム」「バンド」を〈集合〉としたのは、前者はまとまりの内実はどのような組み合わせでもよく、名詞の意味に依存しないのに対し、後者は「人間の集まり」であるという点で特定の意味カテゴリーに属すると考えられるためである。

日本語の名詞は数に対して中立であるが、助数詞をつけることで個別化して最小単位を際立たせることができると述べた。数詞を付けても、名詞の意味が強いものについては、個別性を認識することができないということが考えられる。(6) の今里 (2004) の個別性レベルの違いを例にすると、名詞の助数詞的用法では以下のような捉え方となるだろうか。

(6再掲) そうめんを茹でてみると、1本1本が絹糸のように美しい　(個別)
そうめんを2束茹でた。　(集合)
そうめんを大きな段ボール箱に1000箱分も準備したが完売した。(計量)
(10) ?? 2そうめんを茹でた。
?? 1000そうめん分も準備したが完売した。

(10) では、1そうめんをどのような個別性で判断すればよいのか分からず、境界性が認識できない。

4. 1. 3.　擬似助数詞

擬似助数詞は、準助数詞よりもさらに個別性が判断できない。特に人物を表す名詞が多いが、これらは職業や肩書であるものが多く、〈個別〉〈集合〉などの最小単位はほとんど読み取れない。数字をつけることで、名詞自体の数量を表すことができるが、それは名詞ではなく、数詞が担う機能である。

表3　擬似助数詞（146種）のリスト

抽象的関係（8種）	
事柄	(2) 事件｜不思議
時間	(3) 四半期、時期｜ポスト
空間	(2) 焦点｜海域
量	(1) 指数
人間活動-精神および行為（24種）	
心	(5) 選挙｜原則、条約、新法｜政策
言語	(10) 地名｜漢字｜指標｜通達｜協議、決議｜声明、宣言、布告｜福音書
生活	(4) 公害｜スポーツ、ボーク、死球
交わり	(3) 部会｜会見｜協定
事業	(2) 現業、充電
人間関係の主体（103種）	
人間	(5) 女性｜少女、少年、青年、幼児
家族	(1) 姉妹
人物	(10) 外国人、島民、邦人｜大統領｜藩士｜患者、新人、政治家、博士、要人
成員	(50) 委員、議員、組員、組合員、行員、市議、社員、署員、職員、隊員、町議｜記者、教師、教授、教諭、大関、作家、横綱、力士｜外相、閣僚、裁判官、常務、大使、頭取、判事、奉行、弁護士｜農家｜船員｜警官｜園児、学生、高校生、生徒｜兵士｜会長、学部長、幹部、議長、校長、市長、社長、首脳、知事｜側近｜監督、投手、被告、容疑者
公私	(6) 個人｜加盟国、共和国、国家、大国｜首都
社会	(18) 高校、私大、小学校、大学院、短大｜証券取引所、商品取引所、ターミナル、金融機関、公社、鉱山、証券会社、信金、製鉄所、放送局｜画廊、商社、百貨店
機関	(13) 大使館｜県警、原子力発電所、原発、裁判所、発電所｜審議会｜シンジケート、リーグ、基金、地方自治体、野党、労組
生産物および用具（7種）	
物品	(1) 証券
住居	(1) 住宅
道具	(1) 弾頭
機械	(2) レーダー｜外国車
土地利用	(2) 原子炉、高炉
自然物および自然現象（4種）	
天地	(3) 鉱床、活火山｜湖沼
身体	(1) 死体

強いていえば、地位や役割を示す「ポスト」が〈個別〉、野球における計測の単位である「ボーク」「死球」が、〈計量〉にあたるであろうか。「ポスト」は従来「-口」で数えていたものであ

ると思われる。東条（2014）の調査段階では「擬似助数詞」としていたが、準助数詞として判断すべき語[6)]かもしれない。そうなると、擬似助数詞には〈個別〉にあたるものはないといえる。

4. 2.　範疇化に関する検討

範疇化を備えることのできる名詞の助数詞的用法には、4.1節にて〈集合〉と〈個別〉にあたる以下の語例が該当するといえる。

（11）-家族、-団体、-サークル、-チーム、-パーティー、-バンド／　-筋、-粒、-句、-字、-票、-文、-ページ、-曲、-試合、-ゲーム、-株、-役、-駅、-部屋、-針、-路線、-ポスト

上記の語例のうち、／の前が、人の集合を表すもの、／の後ろが、助数詞の体系でいえば「無生物」に用いられるものにあたる。「無生物」に用いられるものは、「-粒」や「-筋」が形状に基づくもの、そのほかは非形状的な特徴に基づくものであるといえる。これらは、「何（なん）」の付加と「2～3粒」のような概数の付加が可能である。数え上げることもできる。数える対象の名詞と共起でき、副詞的位置に生起することも可能である。また、数える対象の事物も、「筋」は「筋状のもの」、「粒」は「小さくて丸いもの」というように、意味が抽象化されている。形状に基づくもの以外にも、鉄道・バス路線・航路空路などの様々な交通経路を数える「路線」などは、名詞の意味が一般化した後で助数詞用法を獲得したことが田中（2017）によって示されている。

以上のことから、範疇化を獲得している名詞は最も助数詞に近いものといえるだろう。ただし、これらの語には範疇化のレベルの差も見られる。また、個別化の判断についても、より精密に検討する必要があると思われる。

5.　名詞の助数詞的用法が担う範囲

眞野・米澤（2013）は、個別化と範疇化は関連する機能であることに言及しているが、対象物の意味カテゴリーを特定しない名詞や、個別化が判断できない名詞は、全く範疇化と関わりがないのだろうか。

たとえば（12）のような例では、「大学」は「国公立大」と「私立大」の共通するカテゴリーである（より上位の）ものとして示されていると読むことはできないだろうか。

（12）今年で 11 年目となるセンター試験は、すべての国公立大と半数を超える私立大の計403大学が利用。（2000/1/15　一面）

Bisang（1993）は、classificationは文法化（grammaticalization）と関連することを述べ、名詞から類別詞までを五つの段階に分けている。

（13）N ＞ CN（Class nouns）＞ Q（Quantifiers）＞ intr Q（intrinsic quantifiers）＞ CL

（13）でいう N から CL に向かうほど文法化が進むとされる。Class nouns は tree, fruit, bird のように、より具体的な N の属性を決定しうる、抽象化レベルの高い語を指すという。Quantifiersは、「計量・計測的なもの（measures）」、「集合的なもの（collective）」「種類を示すもの（kind）」が入るという。次のintrinsic quantifiersは、classifiersに特有のカテゴリーで、“a lump of sugar”（intr Q）と“one kilogram of sugar”（Q）のように、特定の形状などの内在的なカテゴリーに従って計測されるものであるという。そして最も文法化が進んでいるのがclassfiers（CL）であり、これらの機能は「個別化」と「範疇化」であるという。

日本語に即して考えると、N はいわゆる下位語で、かなり具体的な名詞にあたり、CN は上位語であるといえる。Q はもっぱら計測に使われるという点で、計量類別詞や計量詞がここにあたるといえる。また、準助数詞に多かった、類型を示すものはkindにあたると思われる。

Intr Q には、「－個」や「－つ」のような、無生物であれば範疇化を行わずに数えることができる「デフォルト類別詞（水口 2004b）」が当てはまると思われる。最も文法化が進んだ「classifiers」が、範疇化の機能を獲得しているものを指すのであれば、日本語のintr Qは、範疇化の機能を持たない「－個」や「－つ」に相当するといえる。

Bisangのモデルに従えば、名詞の助数詞的用法では、擬似助数詞と準助数詞のうち、具体的な名詞を示すものが CN にあたる。擬似助数詞は、文章内で臨時的に数と結びついた語であるが、長大な複合語など、具体的すぎる名詞とは数詞は結びつかない（東条 2017）。しかし、準助数詞と比べてみると、「大学」（表2）と「私大」「短大」（表3）のように、準助数詞の方が抽象度の高い名詞になる。類別詞のような「範疇化」とはいえないが、ある種の階層が示されているといえる。

また、準助数詞には、新たな計測単位であると考えたほうがすわりがよいもの（表 2、中項目〈類〉にあたるもの）がいくつもあった。新たな枠組みが必要になる場合というのは、もっぱら名詞の意味分類のためにではなく、その類型を計量したいがためではないかと思われる。

集合物を示すものにも、「セット」や「グループ」など、従来で表しきれなかった計測単位の外来語を助数詞として用いるようになったと考えると不自然ではないだろう。

本稿では、助数詞が備える「個別化」と「範疇化」の機能に注目し、名詞の助数詞的用法がこれらの機能とどう関わるかについて検討した。分析の結果をまとめると以下のようになる。何を最小単位とするかという「個別化」により、助数詞は「個別」「集合」「計量」の三種に分けられるが、数える対象物の名詞の意味を特定しないものは、「範疇化」の機能を持たない。名詞の助数詞的用法では、容器型助数詞は「計量」にもっぱら使われ、準助数詞の一部のみ「個別化」と「範疇化」をもつことが確認できたが、大部分の語は「個別化」の判断自体ができなかった。困難な理由として、準助数詞では、類型を示す名詞が新たな計測単位として取り入れられていることが考えられる。一方で、擬似助数詞は、人物の肩書を示すような具体的な名詞が多いため、そもそも最小単位を認識することができない。

助数詞的用法となる名詞は、Bisang（1993）のいうCNからQに多く分布し、同じCNでも、準助数詞は擬似助数詞よりも抽象度の高い上位の語となる。しかし、擬似助数詞も、具体的すぎる名詞では用いられない。名詞の助数詞的用法のほとんどは、類別詞としての範疇化は持たないが、より上位カテゴリーの名詞が選ばれるという点では、階層差があるといえる。ただし、NからCLへの段階の関係性については、検討すべき点である。また、名詞の個別化の判断についても、個々の用例を見ながらより詳細に記述する必要があるだろう。今後の課題としたい。

注

1）東条（2012）では「名詞と同形の助数詞」。

2）「個別化」と「範疇化」の用語はBisang（1993）より水口（2004a）が訳したもの。そのほか数量類別詞には、言語によって指標化（referentialization）、関係化（relationalization）の機能をもつものがあるという。

3）水口（2004a，b）では「類別詞」。

4）松本（1991）や北原（2007）、影山他（2011）に従えば、「計量類別詞」は「類別詞」と一致しない（ものを含む）が、ここでは用語は変えずに引用した。

5）本資料は、大阪大学大学院文学研究科日本語学講座が毎日新聞社と交わした利用許諾契約・覚書に基づいて使用したものである。

6）「ポスト」を数えるために「1ポスト、2ポスト…」と数えること、「2～3ポスト空きが出る」のような概数や、「全部で何ポストありますか？」のように不定数をつけることも作例では可能である。また、ごくわずかではあったが、連用修飾しているとみられる例もあった：閣僚ゼロの谷垣派は遠藤利明氏が副文部科学相に起用されただけだが、埋め合わせるように常任委員長が3ポスト配分された。（2008/8/17　国際）

参考文献

飯田朝子（1999）『日本語主要助数詞の意味と用法』東京大学大学院人文社会系研究科博士論文.

伊藤由貴（2014）『近代を中心とした助数詞の通時的研究』大阪大学大学院文学研究科博士論文.
今里典子（2004）「非類別詞／類別詞言語を決定する要因について」『シリーズ言語対照 第3巻　類別詞の対照』pp.39-57 くろしお出版.
影山太郎・眞野美穂・米澤優・當野能之（2011）「第1章 名詞の数え方と類別」影山太郎編『日英対照　名詞の意味と構文』pp.10-35 大修館書店.
北原博雄（2007）「助数詞」飛田良文他編『日本語学研究事典』201-202. 明治書院.
国立国語研究所（2004）『分類語彙表―増補改訂版―』大日本図書.
田中佑（2012）「日本語助数詞の範囲―名詞と助数詞の連続性―」『筑波応用言語学研究』19, 117-126.
田中佑（2014）『近現代日本語における新たな助数詞の成立と定着』筑波大学博士論文.
田中佑（2016a）「現代日本語における助数詞への外来語の進出―抽象的概念を表す「－ケース」を例に―」『文藝言語研究』70, 81-106. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.
田中佑（2016b）「外来語名詞「パターン」の助数詞への進出」『言語学論叢オンライン版』9, 1-14. http://hdl.handle.net/2241/00144817（入手2017-07-31）.
田中佑（2017）「「路線」の意味変化と助数詞化」『語彙研究』14, 1-11.
東条佳奈（2012）「助数詞・準助数詞・擬似助数詞―名詞と同形の助数詞をめぐって―」『日本語学会 2012 年度春季大会予稿集』127-134.
東条佳奈（2014）「名詞型助数詞の類型－助数詞・準助数詞・擬似助数詞－」『日本語の研究』10（4）, 16-31
東条佳奈（2017）「擬似助数詞の成立可否を決める要因」『現代日本語研究』9, 76-95.
成田徹男（1990）「名詞と同形の助数詞」『都大論究』27, 1-8.
西光義弘・水口志乃扶編（2004）『シリーズ言語対照 第3巻　類別詞の対照』くろしお出版.
松本曜（1991）「日本語類別詞の意味構造と体系―原型意味論による分析―」『言語研究』99, 82-106.
松本曜（2014）「類別詞」日本語文法学会編『日本語文法事典』672-673. 大修館書店.
眞野美穂・米澤優（2013）「生成語彙理論による助数詞の分析」『レキシコンフォーラム』6, 139-170.
水口志乃扶（2004a）「類別詞とは何か」西光義弘,水口志乃扶編『シリーズ言語対照 第3巻　類別詞の対照』pp.3-22 くろしお出版.
水口志乃扶（2004b）「日本語の類別詞の特性」西光義弘,水口志乃扶編『シリーズ言語対照 第3巻　類別詞の対照』pp.61-78 くろしお出版.
三保忠夫（2010）『日本語の助数詞―研究と資料―』風間書房.
Aikhenvald, Alexandra Y.（2000）*Classifiers*. Oxford: Oxford University Press.
Bisang, Walter.（1993）Classifiers, quantifiers and class nouns in Hmong. *Studies in Language,* 17, 1-51.
Downing, Pamela A.（1996）*Numeral classifier systems: The case of Japanese*. Amsterdam; Philadelphia: John Benjamins Publishing.
Mano Miho.（2013）Exploring the Noun-classifier Continuum in Japanese International Congress of Linguistics. *Abstracts Booklet of the 19th International Congress of Linguists*.
使用データベース
『CD-毎日新聞データ集』日外アソシエーツ.

（文学研究科助教）